



Title	デンマーク語における受動態の頻度 : 文学作品等における受動態頻度数の算出方法
Author(s)	新谷, 俊裕
Citation	IDUN. 1992, 10, p. 101-120
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95827
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デンマーク語における受動態の頻度

— 文学作品等における受動態頻度数の算出方法 —

新 谷 俊 裕

1. はじめに

本誌前号（Ⅸ号）の拙稿（新谷 1990）では、屈折語尾 -(e)s に終わる s-passiv（以下、s-P と略す）と〔助動詞 blive+過去分詞〕による blive-passiv（以下、b-P と略す）の特徴を、例文を挙げながら解説し、デンマーク語作文で受動態を用いる場合のガイドラインを示した。

その際に、外国人向けの現代デンマーク短編集である MF1-3（=*Myrens fortællinger* 1-3）とデンマーク事情の解説書的特点をもつデンマーク語学習書である FJ（=*Familien Jensen*）を調査した。その結果、デンマーク語の受動態の用法に関する研究では古典的といわれている¹⁾ Rehling 1934 と、その Rehling に基づいた Aa. Hansen 1967: 52ff. の示す b-P と s-P の分布の傾向が確認できた。たとえば、s-P は小説（MF1-3）では44%と比較的少なく、説明文の多い FJ では65%と増加している。また、受動態の過去形では s-P は避ける傾向にある（MF1-3, FJ には受動態の過去形が60例あり、そのうち s-P はわずか6例。しかもそのうちの3例は、ほとんど s-P でしか用いられないといわれる *føles*²⁾ であった）。

s-P は口語よりも文語的文章の中でその使用頻度が高いといえるわけであるが、筆者の印象では、MF1-3 のような最近の作品とは異なり、たとえば今世紀の初め頃の文学作品などは文語的性格が強く、したがって s-P の使用頻度が高く、また過去形も多用されている

のではないか。また、受動態自体の使用頻度も最近の作品よりも多いのではないだろうか。本稿ではこの点について検討する。

調査対象としては「1930年代にあって、古典的な格調高い文語体による文体を保持している」(岡田 1983: 91) Karen Blixen の作品を彼女の処女作である *Syv fantastiske Fortællinger* (1935)(SFF と略す) と *Den afrikanske Farm* (1937)(AF と略す) の2点を選ぶ。SFF は周知の如く *Seven Gothic Tales* (1934) のデンマーク語版であるが、その「英語版のタイトルが示すように Gothic 物語で、時代をロマンティズム、19世紀の初頭においていること、登場人物が貴族、僧侶、芸術家などであることから一種の気どりがみられ、擬古典主義的な雰囲気となっている」(岡田: 22) ということから、受動態の頻度、s-P の頻度が高いことが予想される。また、AF は「現代文学の古典とするにふさわしい」(岡田: 91) 作品ということであるが、「彼女の多くの作品(短編)に影響を与えていると思える」(岡田: 125) ので、今回の調査にこの作品を加えることにした。この作品を加えることで、Blixen の受動態の用法に関して全般的に何らかの傾向が判明するかもしれないからである。

2. 受動態の頻度について

2.1. 受動態の頻度数の算出方法について

さて、調査を始めるにあたり、受動態の頻度数の算出方法について考えてみる。

前述の Rehling 1934: 81 によると、受動態の頻度は当然、作者、テーマ、文体等により異なるが、平均すると5%程度であるという(cf. Aa. Hansen: 52)。話し言葉では、特に現代小説や戯曲の台詞からわかることであるが、その率はもう少し低くなり、Karl Larsen の作品中の Hans Peter Egeskov の台詞では1.7%、アンデルセン童話では平均約2%であるという(cf. Aa. Hansen: 53)。一方、

学術文は、客観性・抽象性が高いと思われるが、受動態の頻度は平均8%である。また、その性質上、動作主を示すことが極度に少ない、慣習の描写などといった特定のジャンル——特に言語の用法の記述（言語の用法の説明では、その言語を話す国民あるいは民族の全員が動作主として了解されている）——では、受動態の頻度は20%にもなるという（Rehling: 84f.; Aa. Hansen: 53）。では、Rehlingはどのような方法で受動態の頻度数を算出したのであろうか。

Rehling 1934 はその論文の冒頭で、同論文は統計に基づいており、調査対象は受動形や受動表現などではなく、³⁾ 受動態に転換された文（節）のみであるとする（Rehling: 80）。

Der tages ikke hensyn til enhver passiv form eller ethvert passiv udtryk, men alene til passivvendte sætninger.

したがって、Han lo selv da han blev ramt af en hov. という文は Han lo selv という能動の節と da han blev ramt af en hov という受動の節からなっているから、ここでの受動態の出現率（以下、P率と略す）は50%ということになろう。Jeg gjorde altid hvad der blev sagt. でもP率は同様に50%であろう。では（a）Vi risikerede at blive vist ud. および（b）Jeg kræver ikke at blive elsket. ではどうか。（a）（b）は文全体としては能動であるから受動態の頻度はゼロとなるのか。それでは at blive vist ud, at blive elsket の部分が無視されることになり不都合であろう。また、（c）Jeg hørte dette papir blive læst op. はどうか。（c）も文全体としては能動であるが blive læst op という不定詞句を無視するわけにはいかないであろう。

このように、P率を調査する際に、Rehling のように文（節）を基準にすると、上で見たような不都合が生じることになる。したがって、文（節）の代わりに、定形動詞（動詞の現在形、過去形）ばかりでなく不定詞をも含めた、動詞的要素（以下、動詞素と略す）を

見てみる必要があろう。そうすると例文 (a) には risikerede と blive vist ud の2つの動詞素があり、受動態の頻度は1、P率は50%ということになる。

法の助動詞は受動態になることはない。このことは、受動態の頻度を下げる原因の1つと考えられる。⁴⁾ ということは、法の助動詞もマイナスの負荷をもつ要素として数える対象に入れる必要がある。したがって、(d) Virksomhederne skal tvinges til at investere deres overskud i ny teknik. という文には、skal, tvinges, investere という3つの動詞素があり、この文中の受動態の頻度は1、P率は33.3%ということになる。

不定詞に関しては、法の助動詞と結び付く場合には s-P と b-P とでは意味の違いがある (Aa. Hansen: 54, 148f.; E. Hansen 1972; Rehling: 86; 新谷 1990: 84f.). また、at 付きの不定詞で、s-P がどのように用いられているのかということが当面の関心点である (新谷 1990: 80ff.) ので、不定詞に関しては法の助動詞との結合における場合か、at 不定詞か、それとも例文 (c) における blive læst op のような、まったく独立した不定詞であるかという点を見る必要がある。なお、念のため、完了不定詞 (være blevet + 過去分詞, have været + 過去分詞) についても同様に3種類に分けて調べることにする。

2.2. 受動態かそうでないか？

Rehling: 80 自身が言及しているように、受動態かどうかを判断するのが困難な場合がある。

一つは、s-形動詞が中動態 (注(3)参照) の場合、s-P との区別がつき難いことがある。たとえば、〈存在する〉を意味する findes は受動の意味を完全に失っている。そして、findes は大抵この意味で用いられているが、いつもそうとはかぎらない。

Jeg sagde til dem, at Kiddet skulde findes, og at jeg vilde have det bragt mig om Morgen... (AF: 64)

ここで Kiddet skulde findes は〈その仔鹿が見つけれなくてはいけない〉という受動の意味で、全体として「私はその仔鹿を見つけないと彼らに言った」のである。この受動の意味は同書の同じ段落の終わりに出てくる次の文からより一層明瞭となる。

Jeg hørte dem fordybe sig i den Tanke, at de alle vilde blive afskediget, hvis Kiddet ikke blev fundet. (AF: 64)

fødes に関して Rehling は drøn fra kælvende isbræer da landet fødtes の中の fødtes を〈創造された〉に近い意味, “nærmest = frembragtes という受動 “passivt” と取るか, それとも 〈発生した〉に近い意味, “nærmest = opstod” という中立 “neutralt” と取るか, という疑問を投げかけている。⁵⁾

感情の変化を表す一連の s-形動詞 (cf. 新谷 1986: 17f.), たとえば forskrækkes は〈びっくりする〉のか〈驚かされた〉のか, その判断は文脈に基づいて慎重になされねばならない。

二つ目に受動態かどうかの判断が困難な場合として, blive/være + 過去分詞が結びつく場合がある。これは, 過去分詞が形容詞 (的) か動詞的かにかかっている (cf. Rehling: 80). 過去分詞が形容詞 (的) な場合には, 文の主語の性・数に呼応するので, 判断が容易な場合がある (新谷 1986: 18). たとえば, pigerne blev forskrækkede ved larmen. ただし, この判断基準は Blixen の SFF と AF には適用できない。なぜなら, SFF と AF には b-P, v-P の過去分詞の複数形 -e という一昔前の文法的特徴が見られるからである。

de var blevet kaldte frem for at blive viede... (SFF: 184)

しかし, 全作品を通して一貫してそうなっているわけでもない。

Han havde en lille spottende Latter fuld af Foragt og bedre Viden, som han gjorde Brug af overfor de andre syge Børn, der græd, naar de blev vaskede og forbundet, men han saa heller aldrig paa dem. (AF: 29)

こういった受動態かどうかという判断が困難な場合に, Rehling

はどのように処理したのか、またそれが統計上どう現れているのか記していないのでわからないが、筆者の今回の調査においては、前後関係を十分に検討した上で、個々の場合について判断を下すものとする。しかし、その際に、判断ミスが皆無とはいい難い。したがって、統計上の数字に幾分かのずれがあるかもしれないことを、あらかじめ断っておく。

2.3. s-P と b-P の比率について

さて、§ 2.1でテキスト中に占める P 率の算出方法について方針が決まったが、s-P の頻度、その率も知る必要がある。というのは、法の助動詞が、ある特定の意味を表す場合には s-P としか結合しないとすでに (§ 2.1) 述べたが、これは話し言葉・書き言葉、口語・文語の違いには無関係であり、それ以外の場合には書き言葉的文章、文語的文章で s-P がよく用いられるからである。

表 1. s-P と 迂言的 passiv の分布 (Aa. Hansen: 52-53 より)

	<i>s-passiv</i>	<i>omskrevet passiv</i>
Brøndsted i Danmarks historie I. 11-22	83 %	17 %
J. P. Jacobsen. Niels Lyhne (Saml. Værker II. 1-30)	66 %	34 %
Avis (Information 1/4 63 s.1)	60 %	40 %
Jac. Paludan. Under Regnbuen. 97-108	54 %	46 %
Ny Testamente (1948). Joh. 3, Rom. 1-2, Aab. 1-3	52 %	48 %
Wied. Skærmydsler (replikkerne)	50 %	50 %
Rubow. Georg Brandes og hans Lærere. 1-18	47 %	53 %
Carl Ewald. Eventyr. XV. 1-26	43 %	57 %
H. Pontoppidan. Højsang. 1-85	39 %	61 %
De europæiske ideers historie. 11-21	38 %	62 %
Storm Petersen. Proppen i. 1-61	36 %	64 %
Karen Blixen. Sidste Fortællinger. 9-23	26 %	74 %
Johs. V. Jensen. Singapore Noveller. 1-37	25 %	75 %
Soya. To Traade (replikkerne 33-84)	23 %	77 %
H. C. Andersen. Den grimme Ælling	23 %	77 %
Karl Larsen. Udenfor Rangklasserne. 45-85	23 %	77 %
Karl Larsen. I det gamle Voldkvarter. 1-30	20 %	80 %
Branner. Bjergene. 1-21	17 %	83 %

s-P の頻度に関しては Aa. Hansen の調査がすでにある (表 1)。

この表 1 は s-P と迂言的 passiv との比率を示したものである。迂言的 passiv とは b-P と〔være+過去分詞〕による være-passiv (以下, v-P 略す) のことである。s-P が特に書き言葉に属しており, 話し言葉に近づくほど, その率が下がっていくことが表 1 からわかる (Aa. Hansen: 54)。その点では, この表は貴重な調査結果であると言えるが, この表からは s-P と b-P との比率はわからない。周知の如く, s-P は完了形で現れることは決してなく, 受動態の完了形といえは, b-P の完了形 (være/er/var blevet+過去分詞) のことであり, 場合によっては, v-P が受動態の完了を表すこともある (Aa. Hansen: 143; Diderichsen 1976: 134; Lomholt 1982: 141; Rehling: 86; 新谷 1990: 77ff., 88 注(10))。別の見方をすれば, s-P と b-P との相違は完了形では中和するということである。したがって, s-P と b-P との相違を考慮に入れ, s-P がどのようなテキストで, どのように用いられているのかを知るためには, 受動態の完了形および v-P は考察の対象外とし, もっぱら不定詞, 現在形, 過去形に注目して, s-P と b-P との比較がなされねばならない。

2.4. 受動態頻度数調査の結果 - その具体例

以上のことを調査基準として, 実際に調査を試みる。まず, 表 1 で Aa. Hansen が用いた Brøndsted の *Danmarks historie* I, 11-23 [表 1 で Aa. Hansen は頁を 11-22 としているが, これは誤りであろう] を調べてみる (表 2)。

表 2 から, このテキストにおいて s-P が b-P に比して絶対的に優位だということがわかる。また, s-P は 24, 迂言的 passiv は 5 の頻度であるから〔s-P: 迂言的 passiv 比〕は 83% : 17% であり, これは表 1 で Aa. Hansen が示している結果と合致しているということにも触れておく。

表2. *Danmarks historie* 1, 11-23 における受動態の頻度数

	不定詞			現在	過去	小計	完了						
	法助	ゼロ	at				不定詞			現在	過去	合計	
							法助	ゼロ	at				
s-P	9	－	－	4	11	24						24	
b-P	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	
小計	9	－	－	4	11	24						24	総計
v-P	－	－	－	5	－		－	－	－	－	－	5	
標準頁数		15.4		動詞素数		319		動詞素数／頁		20.7			
P 数	29	P 率		9.1 %	P数／頁		1.9	s-P：b-P 比		100 %：0 %			

表2の上表では s-P, b-P, v-P が不定詞, 現在形, 過去形, 完了形(完了不定詞, 現在完了, 過去完了)で現れる頻度を示す. この上表の見方については, 特に解説は必要ないであろう.

下表について: 標準頁数=テキストを標準頁(デンマークでいう normalside⁶⁾のこと)に換算したもの. 1 標準頁は1300文字である. 動詞素数=全テキスト中の動詞素数. 動詞素数/頁=1 標準頁当りの動詞素数. P 数=全テキスト中の受動態数. P 率=動詞素数に占める受動態の比率. P 数/頁=1 標準頁当りの P 数. s-P : b-P 比=s-P の不定詞, 現在形, 過去形の総数対 b-P の不定詞, 現在形, 過去形の総数(受動態の完了形, すなわち b-P の完了形は除外してある).

次に, その性格上 *Danmarks historie* と同じような結果が予想される *Dansk socialhistorie* を検討してみる(表3: 以下, 紙数の関係上, 簡略化した表で示すことがある).

表3. *Dansk socialhistorie* 1940-1983, 13-28 における受動態の頻度数

標準頁数		27.9		動詞素数		558		動詞素数 / 頁		20.0	
P 数	82	P 率	14.7 %	P数/頁	2.9	s-P : b-P 比		76 % : 24 %			
s-P (計 62) : 法/21, 現/3, 過/38. b-P (計 20) : 法/3, 過/17. b-P 完 (計 0). v-P (計 14) : 法/1, 現/1, 過/11, 完現/1.											

表3からも b-P に対し s-P の優位が確認できる.

さらに, その性格上, P 数が多く, また s-P の頻度も高いと予想される料理のレシピを見てみる(表4).

表4. *Dansk julemad*, 77-100 のレシピの部分における受動態の頻度数

標準頁数		6.2	動詞素数		305	動詞素数 / 頁		49.2
P 数	148	P 率	48.5 %	P数/頁	23.9	s-P : b-P 比	100 % : 0 %	
s-P (計 143) : 法/4, 現/139. b-P (計 0). b-P 完 (計 0). v-P (計 5) : 法/3, 現/2								

表4からは、料理のレシピにおけるP率の高さと s-P の絶対的優位がわかる。

2.5. 動詞素の概算方法について

次に小説におけるP率の状況を MF1 で調べてみる (表5).⁷⁾

表5. MF1 中の短編小説における受動態の頻度数

	s-P	計	b-P	計	v-P	計	標準頁数	動詞素数	P数	P 率	P数/頁	s-P : b-P 比
Bødker	過/1	1	過/2	2	現/1 過/2	3	13.7	512	6	1.2 %	0.4	33 % : 67 %
Hansen	法/2	2	—	—	現/1	1	9.7	399	3	0.8 %	0.3	100 % : 0 %
Varmer	法/1 過/1	2	過/4	4	現/1 過/1	2	15.9	529	8	1.5 %	0.5	33 % : 67 %
Nørbrandt	現/1	1	現/1	1	—	—	9.7	377	2	0.5 %	0.2	50 % : 50 %
Nehm	—	—	at/3	3	—	—	7.6	355	3	0.9 %	0.4	0 % : 100 %

表5において、個々の作品を見ると、標準頁にして10頁前後と大変短いものである上に、受動態の頻度そのものが極度に少ない。これでは、作品中、受動態が1～2例増減するだけで、P率にしろ、〔s-P : b-P 比〕にしろ、相当な変化が予想される。そういう意味では、個々の作品の統計、表5はあまり説得力のあるものとは思われない。しかし一方、それぞれの作品が多数の類似点を見せているのも事実である。MF1全体は、複数の作家によるものであるが、ではこれを現代小説というジャンル、1つの作品として検討してみよう (表6)。また、MF2, MF3⁸⁾ も調べる (表7, 表8)。

表6. MF1における受動態の頻度数

標準頁数		56.2	動詞素数		2172	動詞素数 / 頁		38.7
P 数	22	P 率	1.0 %	P数/頁	0.4	s-P : b-P 比	38 % : 62 %	
s-P (計 6) : 法/3, 現/1, 過/2. b-P (計 10) : at/3, 現/1, 過/6. b-P 完 (計 0) v-P (計 6) : 現/3, 過/3								

表7. MF2における受動態の頻度数

標準頁数		49.2	動詞素数		1981	動詞素数 / 頁		40.3
P 数	31	P 率	1.6 %	P数/頁	0.6	s-P : b-P 比	35 % : 65 %	
s-P (計 8) : 法/6, 現/1, 過/1. b-P (計 15) : at/1, 現/2, 過/12. b-P 完 (計2) : 完過/2. v-P (計 6) : 現/1, 過/3, 完法/1, 完現/1								

表8. MF3における受動態の頻度数

標準頁数		52.3	動詞素数		1927	動詞素数 / 頁		36.8
P 数	50	P 率	2.5 %	P数/頁	1.0	s-P : b-P 比	54 % : 46 %	
s-P (計 15) : 法/11, 現/3, 過/1. b-P (計 13) : at/2, 現/1, 過/10. b-P 完 (計 0) v-P (計 22) : 現/2, 過/20								

MF1-3 の調査を行う過程で、MF1-3 は多数の作家によるものであるにもかかわらず、頁毎の動詞素数にそれほど大きな揺れがないことに気付く。⁹⁾ 動詞素数は1頁につき MF1 は平均65.8 (標準頁では38.7), MF2 は平均68.8 (標準頁では40.3), MF3 では平均64.0 (標準頁では36.8) である。そこで、今後の調査の労力軽減のため、動詞素数は、各作品から等間隔に選出した頁(余白のある場合は次頁)、約10サンプルの平均値から作品全体の概数を求めるものとする。たとえば、MF1 では、原則として5頁毎に各短編からサンプルを選んだ: 15-62 (第15頁目に動詞素62個、と読む)、26-70, 35-43, 40-57, 46-68, 55-88: 1頁あたり平均64.66, 全体として動詞素数の概数は2100(10の位を四捨五入)と実際の数2172から掛け離れた数字ではない。同様に求めた MF2, MF3 の動詞素の概数は、MF2 - 1900, MF3 - 2000で、実数、MF2 - 1981, MF3 - 1927とそれほど掛け離れた数字ではない。以下に、動詞素の概数を用いて MF1-3 の P 率等を示す(表9-表11)。

られる今世紀初頭の小説（表16）を調査し，前節で導いた概算方法により求めた動詞素の概数に基づいてP率等を示す．

表14. Branner. *Rytteren* における受動態の頻度数

標準頁数		184.6	動詞素数		約 8400	動詞素数 / 頁		45.5
P 数	70	P 率	0.8 %	P数/頁	0.4	s-P ; b-P 比	44 % : 56 %	
s-P (計 16) : 法/13, at/1, 現/2. b-P (計 20) : 法/1, at/7, 現/4, 過/8. b-P 完 (計 0). v-P (計 34) : 法/1, 現/10, 過/23								

表15. Panduro. *Bella* の台詞部分における受動態の頻度数

標準頁数		67.7		動詞素数		約 2400		動詞素数 / 頁		35.5					
P 数		9		P 率		0.4 %		P 数 / 頁		0.1		s-P : b-P 比		60 % : 40 %	
s-P (計 3) : 法/2, 現/1. b-P (計 2) : 法/2. b-P 完 (計 0). v-P (計 4) : 現/3, 過/1															

表16. Pontoppidan. *Den kongelige gæst* における受動態の頻度数

標準頁数		75.4	動詞素数		約 2700	動詞素数 / 頁		35.8
P 数	69	P 率	2.6 %	P数/頁	0.9	s-P : b-P 比	85 % : 15 %	
s-P (計 40) : 法/13, at/8, 現/5, 過/14. b-P (計 7) : 過/7. b-P 完 (計 7) : 完 at/1, 完過/6. v-P (計 15) : ゼロ/1, 現/2, 過/10, 完過/2								

2.7. 受動態頻度調査方法の妥当性

各種テキストにおける受動態の頻度を調べるために，§ 2.1以後，その調査基準，調査方法等を検討してきたが，本節では，その妥当性を見つめる．これまでの調査結果を以下にまとめる（表17）．

表17. 各種テキスト中の受動態の頻度数

	標準頁数	動詞素数	動詞素数/頁	P 数	P 率	P数/頁	s-P : b-P 比
表2. <i>Da. hist.</i>	15.4	319	20.7	29	9.1 %	1.9	100 % : 0 %
表3. <i>Da. soc.</i>	27.9	558	20.0	82	14.7 %	2.9	76 % : 24 %
表4. <i>Da. j.-mad</i> レシビー部分	6.2	305	49.2	148	48.5 %	23.9	100 % : 0 %
表6. MF 1	56.2	2172	38.7	22	1.0 %	0.4	38 % : 62 %
表7. MF 2	49.2	1981	40.3	31	1.6 %	0.6	35 % : 65 %
表8. MF 3	52.3	1927	36.8	50	2.5 %	1.0	54 % : 46 %

表12. FJ	60.0	約 1900	31.7	153	8.1 %	2.6	64 % : 36 %
表13. Søbørg	181.5	約 8100	44.6	114	1.4 %	0.6	39 % : 61 %
表14. Branner	184.6	約 8400	45.5	70	0.8 %	0.4	44 % : 56 %
表15. Panduro 台詞部分	67.7	約 2400	35.5	9	0.4 %	0.1	60 % : 40 %
表16. Pontoppidan	75.4	約 2700	35.8	69	2.6 %	0.9	85 % : 15 %

P率は、歴史や社会史を扱った学術文では9.1%，14.7%，デンマークの社会事情を解説するデンマーク語学習書 FJ でも8.1%という比較的高い数値を示している．料理のレシピでは48.5%で，動詞素の半数近くが受動態である．現代小説（MF1-3, Søbørg, Branner）では，MF3を除けば，0.8%～1.6%という比較的低い数値を示している．MF3のP率が2.5%と他の現代小説と比べて1%強高いのは，P率の高い短編が半数以上あるからである（Seeberg 2.9%，Bang 2.1%：これらは地の文が多く，会話部分が比較的少ない．Thorup 7.3%，Krasilnikoff 2.5%：これらは会話部分が皆無に近い）．今世紀初頭の小説 Pontoppidan では2.6%と，平均的現代小説よりも1%強高い数値を示している．小説のジャンルでは，P率はふつう1%前後であり，受動態の多い作品では2.5%前後であると言えるであろうか．テレビドラマの脚本の台詞（Panduro）はP率が0.4%と低く，会話では受動態があまり用いられないということを反映している．

今回の調査で得られたP率の数値そのものは予想しえなかったものであり，§2.1で見た Rehling の数値より幾分低いようであるが，全体の傾向は予想通りである．したがって，本稿で検討したP率の算出方法は今後十分活用できるものと言えよう．

〔s-P：b-P 比〕から書き言葉的テキストには s-P の比率が高いことが確認される．また，MF3をも含めて，P率が高いと s-P 比も高いということ（Rehling：88）も確認される．表2－表8，表12－表16から，s-P は法の助動詞の後で多く用いられており，

“Aben”				標準頁数	90.0	動詞素数	約 3100	動詞素数/頁	34.4
P 数	100	P 率	3.2 %	P 数/頁	1.1	s-P : b-P 比	64 % : 36 %		
s-P (計 32) : 法/7, ゼロ/2, 現/11, 過/12. b-P (計 18) : 法/2, ゼロ/1, at/2, 現/3, 過/10. b-P 完 (計 12) : 完法/1, 完現/3, 完過/8. v-P (計 38) : 現/6, 過/31, 完過/1									
“Syndfloden over Norderney”				標準頁数	133.1	動詞素数	約 4800	動詞素数/頁	36.1
P 数	181	P 率	3.8 %	P 数/頁	1.4	s-P : b-P 比	49 % : 51 %		
s-P (計 57) : 法/21, at/2, 現/24, 過/10. b-P (計 59) : 法/6, at/4, 現/3, 過/46. b-P 完 (計 27) : 完法/1, 完現/11, 完過15. v-P (計 38) : 現/14, 過/23, 完過/1									
“Et Familielskab i Helsingør”				標準頁数	90.0	動詞素数	約 3200	動詞素数/頁	35.6
P 数	133	P 率	4.2 %	P 数/頁	1.5	s-P : b-P 比	36 % : 64 %		
s-P (計 26) : 法/11, at/1, 現/1, 過/13. b-P (計 46) : 法/2, ゼロ/1, at/1, 現/3, 過/39. b-P 完 (計 16) : 完法/1, 完現/3, 完過/12. v-P (計 45) : 法/1, at/2, 現/3, 過/39,									
“Drømmerne”				標準頁数	146.2	動詞素数	約 5700	動詞素数/頁	39.0
P 数	208	P 率	3.6 %	P 数/頁	1.4	s-P : b-P 比	32 % : 68 %		
s-P (計 37) : 法/11, ゼロ/2, at/5, 現/6, 過/13. b-P (計 79) : 法/6, ゼロ/1, at/8, 現/10, 過/54. b-P 完 (計 38) : 完法/1, 完現/9, 完過/28. v-P (計 54) : 法/1, 現/15, 過/33, 完法/1, 完過/4									
“Digteren”				標準頁数	113.1	動詞素数	約 4000	動詞素数/頁	35.4
P 数	166	P 率	4.2 %	P 数/頁	1.5	s-P : b-P 比	36 % : 64 %		
s-P (計 31) : 法/11, 現/7, 過/13. b-P (計 56) : 法/4, at/3, 現/8, 過/41. b-P 完 (計 27) : 完法/1, 完現/8, 完過/18. v-P (計 52) : 法/3, 現/6, 過/40, 完過/3									

表19. SFF 全体における受動態の頻度数

	不 定 詞			現在	過去	小計	完 了					合計			
	法助	ゼロ	at				不 定 詞			現在	過去				
							法助	ゼロ	at						
s-P	77	4	15	54	81	231						231			
b-P	23	4	29	37	214	307	6	—	1	38	94	446			
小計	100	8	44	91	295	538						677	総計		
v-P	8	—	2	61	215		3	—	—	1	14	304		981	
標準 頁 数			712.3		動 詞 素 数			約 26200		動 詞 素 数 / 頁			36.8		
P 数		981		P 率		3.7 %		P数/頁		1.4		s-P : b-P 比		43 % : 57 %	

SFF の物語は7つとも3.2%～4.2%というP率を示し (表18), SFF

表20. AF における受動態の頻度数

	不 定 詞			現在	過去	小計	完 了					合計	
	法助	ゼロ	at				不 定 詞			現在	過去		
							法助	ゼロ	at				
s-P	72	－	2	18	6	98						98	
b-P	12	2	27	33	252	326	7	－	4	19	112	468	
小計	84	2	29	51	258	424	／v-P の願望法現在：1＼					566	
v-P	2	－	3	43	133		3	－	－	1	4	190	
													756
標 準 頁 数		585.4		動 詞 素 数		約 19500		動 詞 素 数 / 頁		33.3			
P 数	756	P 率		3.9 %	P数/頁		1.3	s-P：b-P 比		23 %：77 %			

全体では Pontoppidan (表16) の2.6%よりもずっと高く3.7%である (表19). これは SFF のもつ「擬古典的な雰囲気」(岡田: 22) と合致していると言えよう. AF (表20) もアフリカでの生活“描写”のためかP率が3.9%と高い. しかし, SFF, AF はP率の高さにもかかわらず, s-P の b-P に対する比率があまり高くない. AF では23%と, むしろ最近の小説よりも s-P 比が低いくらいである. また, AF は全体としてはP率が高いにもかかわらず, s-P の過去形がわずか6例 (そのうち4例が *føltes*, 1例が *antoges* と, いずれも b-P への転換不可能) ということから, 極度に話し言葉に近いということが言えるかも知れない.

4. おわりに

本稿では, デンマーク語の受動態の頻度の調査方法の検討をしたが, その調査の結果得たデータを十分に考察することができなかった. Blixen の作品のデータ等の考察は別の機会に行う. また, デンマーク語の受動態に関しては, 法の助動詞と結合する場合の受動態の意味等 (cf. § 2.1, 新谷 1990: 84f.),¹¹⁾ s-P の at 不定詞の存在とその意味 (cf. § 2.1, 新谷 1990: 84ff.) 等々, 考察すべきことが多々あるが, これらは先の課題としたい. (okt. '91)

注

- (1) Løj & Wille 1985: 10.
- (2) Cf. Aa. Hansen 1967: 140. なお, føles については別の機会に考察する.
- (3) ここでいう調査対象外の受動形とは synes のように形は s-形であるが, 意味が受動ではない, いわゆる中動態 (中間態, あるいは中立態 (cf. 新谷 1986)) のことであろう. また, 調査対象外の受動表現とは, Bogen er ikke til at forstå <その本は理解できない (理解されえない)> や Han lod sit hus bygge af byens bedste tømrer <彼は自分の家を町一番の大工に建てさせた> のような文中の不定詞部分のことではないかと考えられる. また, Jeg fik bilen repareret <私は車を修理してもらった> のような文もここに入るかも知れない. つまり, Rehling は形式的にも意味的にも受動である s-P と b-P と〔助動詞 være+過去分詞〕による være-passiv を調査対象にしている (cf. Aa. Hansen: 52).
- (4) "Alt dette forklarer endnu ikke den, bortset fra særlige tilfælde, overmåde sparsomme brug af passiv" (Rehling: 82) <こういうこと [筆者付記: たとえば法の助動詞が受動態にならないこと] だけでは受動態の使用頻度が低いことを説明しきれない>
- (5) Rehling の示す例文中の fødtes は fødes の用法の特殊な場合であるといえるが, 一般的に fødes は <生まれる> を意味する中動態の動詞である. これは, 日本語の「生まれる/産まれる」が自動詞である (森田 1989: 197f.) ことを参考にすれば少しは理解できよう. また, ラテン語で <生まれる> は nascor といい, 形式所相動詞 verba deponentia に分類される. 形式所相動詞とは, 能動形がなく, 受動形が能動の意味をもつ動詞のことである (cf. 泉井 1952: 236; 松平・国原 1975: 130f.). 形式所相動詞はデンマーク語では deponente verber と呼び, Hyllsted & Østergaard 1966: 79 によると, やはり "de har passiv form, men aktiv betydning" とある. そして, nascor はここでも deponente verber に分類されており, その意味は "fødes" であるとされる (Hyllsted & Østergaard: 87). これは, 受動の意味をもつ s-P としての fødtes の存在を否定あるいは無視していることになろう (詳しくは別の機会に考察する).
- (6) デンマークでは, たとえば eksamenspensen <試験条件/範囲> の算出基準として, normalside <標準頁> が用いられる. normalside は 1 頁 1300 文字である (cf. Gyldendals tibinds leksikon, bd. 7. normalside の項).
- (7) MF1 には Bødker, Cecil. "Juletræstyven", 11-19. Turéil, Dan. "Hjemløs kærlighed", 21-23. Hansen, Hans. "Vore grønne hjerter", 25-30. Varmer, Hjørdis. "Er du én af dem?", 33-42. Nordbrandt, Henrik. "Hullet i kælderen", 45-50. Nehm, John. "Fast ophold", 53-57. を収

録. Turèll の作品 (詩) は、標準頁にして 1 頁に満たないので、今回の調査には入れない。

- (8) MF3 の Pia Tafdrup の作品 (詩) “Sten for sten” (29-36) も、標準頁にして 1 頁に満たないので、今回の調査には入れない。
- (9) MF1 の各頁における動詞素数: 11-48 (第11頁目に動詞素48個、と読む)、12-79, 13-59, 14-64, 15-62, 16-63, 17-66, 18-59, 19-12 (余白多し); 25-57, 26-70, 27-67, 28-74, 29-73, 30-58; 33-45, 34-52, 35-43, 36-59, 37-62, 38-63, 39-64, 40-57, 41-51, 42-33; 45-56, 46-68, 47-73, 48-75, 49-57, 50-48; 53-71, 54-66, 55-88, 56-85, 57-45.
- (10) FJ の最後の章 “Danmark i avisen” は新聞記事を集めたものであり、FJ の他の章とは文章の性格が異なるので、今回の調査に入れない。
- (11) 本誌前号 (新谷 1990: 84f.) で触れたように、E. Hansen 1972 は、法の助動詞 ville, skulle, måtte, burde がその本来の意味を表す場合には、s-P が用いられ、法の助動詞が発話全体にかかる場合と、文の主語以外の人の利害を表す場合には b-P が用いられると言う。このことはさらに検討する必要があるうし、E. Hansen の扱っていない kunne と turde に関しても考察されねばならない。ただ、Aa. Hansen: 148f. は kunne に関して次のようであると言う。kulle は s-P と起こる場合には「能力」“evne, formåen”を表し、b-P と起こる場合には「権利、資格」“berettigelse”を表すと: stillingen kan søges af cand. mag.'er. - det kan siges med rette. - det kan let gøres. 対 stillingen kan blive søgt af cand. mag.'er. 等々。また、Aa. Hansen: 148f. によると、多数の、弱強勢の動詞と名詞からなる慣用表現、〔強勢消失結合〕“tryktabsforbindelse”が法の助動詞と起こる場合には s-P のみが用いられるということにも言及しておく: der kan ikke skydes genvej mellem tiger og menneske.

Om udregningsmetoden af passivens hyppighed i dansk

Toshihiro Shintani

Resumé

Jeg vil undersøge passivens forekomst og hyppighed i Karen Blixens værker, *Syv fantastiske Fortællinger* og *Den afrikanske Farm*, og dermed finde ud af, hvordan passiven bruges hos hende.

Det står dog ikke klart, ud fra hvilke kriterier og med hvilken metode passivens forekomst og hyppighed skal undersøges. Rehling (1934) og Aage Hansen (1967) kigger kun på passivvendte sætninger, når de tæller passiv. Er sætning (a) *vi risikerede at blive vist ud* en passivvendt sætning? Nej, som helhed er den jo en aktiv sætning. Skal den del *at blive vist ud* ikke tælles med? Hvad med (b) *Jeg kræver at blive elsket* og (c) *Jeg hørte dette papir blive læst op*? Ja, det er ikke sætninger, men verbale størrelser som præsensformer, præteritumsformer og infinitiver, man skal kigge på, når man tæller passiv.

I denne artikel vil jeg først diskutere udregningskriterier og -metode for passivens forekomst og hyppighed i dansk. Derefter undersøger jeg diverse værker, bl.a. Blixens ovennævnte to. Resultaterne diskuteres også, dog i et meget begrænset omfang.

参 考 文 献

(外国語文献は特記のないかぎり発行地は København, 日本語文献は東京)

- Diderichsen, Paul. 1976. *Elementær dansk Grammatik*. 3. udg. Gyldendal.
- Hansen, Aage. 1967. *Moderne dansk* III. Grafisk Forlag.
- Hansen, Erik. 1972. "Modal interessens. Nu bør det (komme) frem", *Danske Studier*, 5-36.
- Hyllested, Povl og Østergaard, Ulf. 1966. *Latinsk grammatik. Håndbog for gymnasiet*. Gyldendal.
- 泉井久之助 1952. 『ラテン広文典』. 白水社.
- Lomholt, Jørgen. 1982. *Le Danois Contemporain*. Akademisk Forlag.
- Løj, Mogens & Wille, Niels Erik. 1985. "Kan vi undvære passiv? eller: Kan passiv virkelig undværes? En undersøgelse af passivformernes grammatik, stilistik og pragmatik", *Nys (= Nydanske studier & almen kommunikationsteori)* 15, 5-42.
- 松平千秋・国原吉之助 1975. 『新ラテン文法』. 第7版(初版 1968). 南江堂.
- Mikkelsen, Kr. 1975 (1911). *Dansk ordføjningslære*. Hans Reitzels Forlag.

- 森田良行 1989.『基礎日本語辞典』. 角川書店.
- 岡田令子 1983.『現代デンマーク語の発生とその文体的特徴 — Karen Blixen の作品を中心として — 』. 山口書店. 京都.
- Rehling, Erik. 1934. "Om brug af passiv i dansk", *Studier tilegnede Verner Dahlerup*. København - Aarhus, 80-88.
- 新谷俊裕 1986.「デンマーク語の s-形動詞による中立態」. *Idun* VII, 5-25.
- . 1990.「現代デンマーク語の s-passiv と blive-passiv の用法について」. *Idun* IX, 65-92.

資 料

(発行地は特記のないかぎり København)

- Blixen, Karen. 1975 (1935). *Syv fantastiske Fortællinger*. 5. udg. Gyldendal.
- . 1977 (1937). *Den afrikanske Farm*. Gyldendal.
- Boesen, Ulrik. 1986. *Dansk julemad*. Centrum.
- Branner, H. C. 1971 (1949). *Rytteren*. Gyldendals Tranebøger.
- Brøndsted, Johannes. 1963. *Danmarks historie*, bd. 1. Politikens Forlag.
- Hansen, Svend Aage & Henriksen, Ingrid. 1984 (1980). *Dansk socialhistorie 1940-1983*. 2. udg. Gyldendal.
- Panduro, Leif. 1973 (1971). 'Bella', *Bella & Et godt liv*. Gyldendals Tranebøger, 7-69.
- Planck, Christian. 1987. *Familien Jensen - og alle os andre. Danske tekster for udlændinge*. 2. udg. 2. opl. Jørgen Paludans Forlag.
- Pontoppidan, Henrik. 1983 (1908). *Den kongelige gæst*. 7. udg. (1. Tranebogsudgave, 1. oplag) Gyldendals Tranebøger.
- Søeborg, Finn. 1973 (1955). *Vi har det jo dejligt*. Navers Billigbøger.
- Wraa, Ingrid & Dalager, Niels (red.). 1987a. *Myrens fortællinger 1. 6 fortællinger på et ukompliceret dansk*. Forlaget Myren. Middelfart.
- . 1987b. *Myrens fortællinger 2. 6 fortællinger på et ukompliceret dansk*. Forlaget Myren. Middelfart.
- . 1989. *Myrens fortællinger 3. 7 fortællinger på et ukompliceret dansk*. Forlaget Myren. Middelfart.